

## 女優・ダンサー 森田かずよ

もりた かずよ



「表現活動やコンテンポラリーダンスを始めたきっかけ」

——ダンスや演劇を始めたきっかけは？  
森田.. 小さな頃から音楽や舞台が好きだったんです。バイオリン教室には6歳から通っていました。歌うことも好きで、高校2年生のときに宝塚の舞台を見て目覚めたんです。子どもの頃、バレエを習いたかったんですけど、でも、きっと自分にはできないだろうと

も思っていました。そういう気持ちの延長もあつたと思います。

——小さな頃にしかつたことや、夢や憧れが、今に繋がっているんですね。

森田.. ええ。そして、高3のときに転機がありました。芸大で舞台芸術を専攻したかったんですが、学科の趣旨を理解されていますか？って聞かれて、障がいがあるから受験できないんだと気がきました。これまでもできないことはいっぱいありましたが、自分の進路を否定されたのは初めてで、悔しいというよりただただショックでした。決めつけられたことがショックでしたし、自分がそれに言い返すことができないのもすごく嫌でした。それがきっかけで、障がい者が表現するということについて考えるようになったんです。

——障がいに限らず、始める前から選別されてしまうことってありますよね。でも、そのせいで自分自身の夢をあきらめなければならなかったり、アイデンティティを変えざるをえないようなことはあつてはならないと思います。

森田.. そうです。だから、大学進学後は演劇部に入った。プロを目指すミュージカルスクールに入れてもらったり、ありとあらゆることをしました。当時はまだ、障がいのある人向けのワークショップやカンパニーが

日本になかったので、海外の事例も調べたりしながら学生時代の4年間は、やみくもに可能性を探りました。

——具体的にはどんなことをされたんですか？

森田.. バレエは今でも続けていますが、そのほかにもジャズダンスとか、タップダンスとかお能とか。今考えると、服を試着して選ぶ感じに似てるのかな。自分が何が似合うかフィッティングしてみても、いいとこどりをしていた感じですね。

——バレエやお能って、型が決まっていますよね？

森田.. 私もそう思っていました。でも、海外では車いすの子が、アームスパレエの腕の動きや型の練習のためだけにスタジオに通っているそうなんです。それを聞いて、全てを型にはめてもいいんだって思うようになりました。自分の芯がぶれなければ、なんでも思いのままにやってみようって思っていました。

——そこからコンテンポラリーダンスを始めたのは、どういう経緯だったんですか？

森田.. 自分が自分の踊りを作りたいんです。最初はそれがコンテンポラリーダンスだということ自覚はありませんでした。大学卒業後、NPO法人DANCEBOXの「ダンス・サーカス」というプログラムに参加したんです。そこで

初めて自分の作品を発表して、好評をいただきました。制作のしんどさや難しさも知りましたが、参加して本当によかったと思っています。

——「作品制作について」

——『アルクアシタ』で、義足を外して立つ瞬間に、森田さんが独りて身体や宿命と向き合っていること、誰もが独りて何かと向き合っているんだということを感じました。

森田.. ありがとうございます。車いすを使うようになってから「歩く」ということについて考えるようになりました。義足を付けていても歩くだけ、外しても歩くだけ。いつか義足を着けているときと外しているときの身体性の違いを作品にしてみたいと思っていたんです。

——「歩く」とは、自分の意思で進むという意味も含むのでしょうか？

森田.. 「歩く」ということには、意思が伴ってほしいんです。それは車いすであっても同じです。これまでは自分の姿や動作を客観的にイメージして、それに自分の身体を寄せるように振り付けをしていましたが、今は逆の作り方をしています。自分の身体性や日常の動作を重点的に捉えながら作っています。私に

とって障がいとは、逃れられないものだから、それが客観的にどう見えているかを意識しています。

——身体や経験もひっくり返るため、1人の人間として表現をするということですね。

森田.. それはすごく意識しています。若いときははたかやみくもにやってきたので、いま、やっと自分のしていることを言葉としても語れるようになってきました。

——自分自身を客観的に捉えるということ」

森田.. 私はどういいう障がいなんですか？森田.. 二分群性症です。先天性のもので、感覚の麻痺や運動障害があります。あと側弯症から呼吸機能障がいが起きているので、肺活量が成人女性だと平均2000〜3000mlのところ、720mlしかなくて、15分踊った

ら、10分くらい倒れこんでしまいます。『アルクアシタ』は激しい動きのある作品なので、毎回上演するたびに体調を壊しています。表現を始めてから、よりシビアに障がいと向き合うことが必要になりました。自分の身体的な部分から目をそらさず、そこから何かを生み出したい。それはしんどいことなのかもしれない。でも、私はパフォーマンスを通じて、自分らしい表現の在り方を探ることで、障がい

いに対して前向きになれたように思います。

——森田さんが強い意志を持って生きていらっしゃるお姿は、人としてとても魅力的だと思います。自分の境遇や身体と、どうやって真摯に向き合えるんでしょうか？

森田.. 実は、3年前に卵巣を摘出したとき初めて障がいのある身体を憎みました。体力もあきらかに落ちたし、生活もホルモンバランスに振り回されるため変わってしまいました。でも、ちゃんと身体のことを考えられるようになったし、これまで知らなかった世界を見ることができて良かったのかなって思います。

——自分自身を客観的に見られるようになって

たのは、その後ですか？

森田.. はい。ちょうどその頃、人形作家の井筒さんが私自身の想像作品を作ってください、数年かけて私の身体の変化をよく見ていただきました。今後は新しい挑戦として、映像の中で自分の身体性を活かした表現もしてみたいと思っています。

——楽しみです。意思をもって1歩進むということ、自分の想いを伝えていくこと、そしてそれをどうやって未来に残していくのが大切だと感じました。今日はありがとうございました。

